日蓮上人一代圖會

壹

へ波13
594
1

文
594
1-6

日蓮聖人一代圖會叙

叙曰昔朝公述鼻祖一代之大綱名之曰化導記爾来諸師著作桃李矜艶蘭菊爭芳各雖盡善非無小異獨至如六牙潮師之別頭統紀可謂集而大成矣雖然文章廣博句句聯玉意味深長不

為易解童蒙之徒何以得探其頤哉于
茲清信之高士深憂此事寓目囊箱終
集薩埵一代之事業撰為六卷大憑潮
公之統紀取槩和文傍填國字往往擧
諸傳之異説間又加以圖繪逆機之兒
輩見之豈不結勝緣哉若有我慢之輩
雖起輕毀之言謗罪猶勝敬權佛本化
薩埵利物化他唯要使本末有善之族
終歸實善惟塔中別命之徒眞俗殊體
互現娑婆廣開妙扇普靡玄風所作佛
事未曾暫廢冥顯六或和光同塵底下
凡慮何以可測哉憶以高士謂六万恒

沙之眷屬亦不可乎文字一說解脫然則無此書者無由見法祖一代之成功祖者是邑讀法花之理體也欲見法花之理體宜於此書尋求焉嗚嘻偉哉文字之德方知其現紙面應于世務成功而退猶孫吳之應變用奇正不有文字何知奥妙之佛心不有著作爭知古今之事蹟於茲傳記著述之功德猶勝讃恒沙之佛陀者聊頌微管題其首耳

安政戊午仲烁

房州小湊誕生寺

現住　日琢

日蓮上人一代圖會總目錄

卷之壹

第一　上人家系誕生及び清澄寺に入て修学の事
第二　高祖虚空藏の示現により鎌倉光明寺に入の事
第三　高祖北叡山及び南都七大寺遊学の事
第四　高祖天王寺に入り伊勢の宗廟を詣の事
第五　川越に父の舊友を訪ひ故郷安房へ歸りの事
第六　高祖鎌倉に到り比企能本を示の事

卷之貳

第七　肇めて妙法を唱への且日蓮と更めの事
第八　他宗の非を挙それを破る工藤が下知越との事
第九　鎌倉天竟地妖并高祖岩本實相寺に入の事
第十　立正安國論を呈并高祖面前時頼に諫めの事
第十一　賊徒松葉谷夜討并高祖富木常忍が第に到りの事
第十二　大祝兼益神道傳授并高祖伊東へ貶謫の事
第十三　朝高妙法に皈并高祖日輪中の二菩薩開眼の事

卷之參

第十四　伊東に謫赦免并老母の死に復りの事
第十五　小松原の御難并南條へ與への御書の事
第十六　天災地妖并高祖の母堂卒去の事
第十七　高祖鎌倉に歸りの并当家古書簡を贈る事
第十八　高祖十一箇所へ書を贈りの并諸家驗擾の事
第十九　高祖甲州に杖を曳の并勸持品偈の事
第二十　霊山に寄請雨并行敏官に訴る事
第廿一　高祖廢所に出の并行敏が訴書返答の事

卷之肆

第九二　高祖擒み就ゐ人并龍の口に難寺に赦免の事
第九三　高祖佐渡ゑ謫せらるゝ角田の巖題目并巖島女昌芙蓉羅の事
第九四　佐州塚原問答并重連ゑ乱を告ゐ事
第九五　高祖佐州ゑ在て所〻へ名判を遣ゐ事
第九六　蒙古賊襲来の大畧并日朗赦牒を持佐渡へ渡らるゝ事
第九七　高祖歸路の教化并若狹の弓ゲ灵を鎮めゐ事

卷之伍

第九八　時宗宗牒を高祖ゑ賜ふ并高祖身延へ入ゐ事
第九九　善智と法力を角ぐる并鴉飼を得度の事
第三十　高祖所〻遊化の并孝道全さ事
第一　経一麻呂日朗ゑ従ふ并身延山の記の事
第二　富木氏母の喪を修む并清澄道善法印遷化の事
第三　龍象房邪説并身延七面明神化現の事
第四　阿佛房三さび身延へ訊ふ并大黒天の像を常忍ゑ與ゐ事
第五　蒙古襲来の沙汰并身延ゑ堂宇を建る事

卷之陸

第六　三大祕書を太田氏ゑ賜ふ并異賊襲来の事
第七　蒙古襲来一始終の大畧
第八　雲佛の眞影并諸書異説の事
第九　日法彫刻を善んじ并當忍家族疫疾の事
第十　高祖池上ゑ赴さるゝ并本門寺開堂供養の事
第十一　高祖病篤一并諸子へ遺誡の事
第十二　高祖入滅并茶毘葬儀の事
第十三　法子法孫の智識列位の事
第十四　日蓮大菩薩号ゲ并身延住持紫衣參内の事

通計六卷四十四條總標目畢

貫名次郎重忠

妙ヶ法ノ蓮ノ華ノ一経
普賢菩薩
永樂斎
山嵜左近
従五位
兼良娘
梅菊

高祖身延山ホ七面明神教化之圖

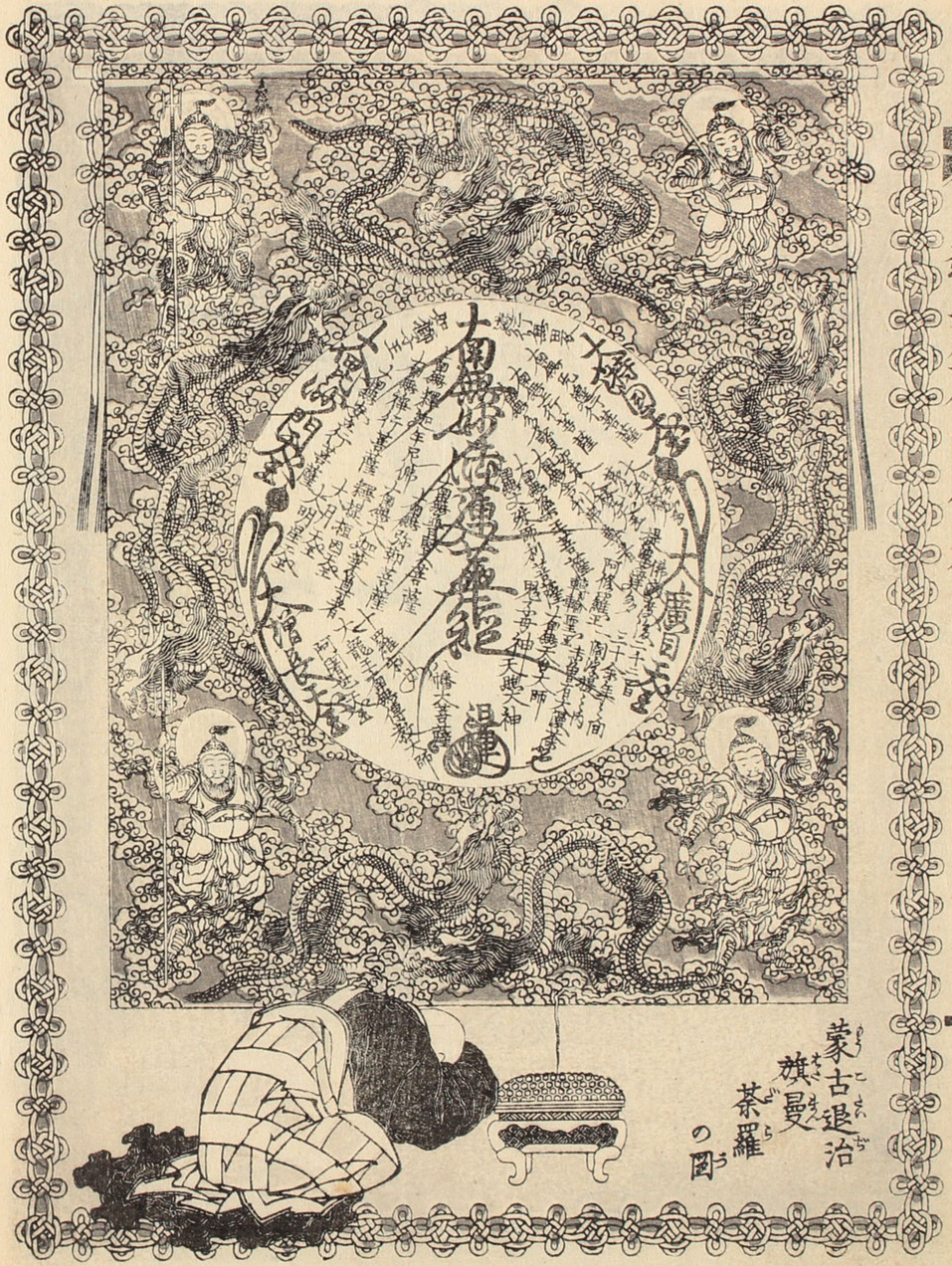
三十番神之其内

法華經
守護神

祇園大明神

日蓮上人一代圖會卷之一

第一　上人家系誕生及び清澄寺に入て修学の事



チ、ヨリ エンシウ。ナガサノ コホリトウデウノカウ カタウミ イチカハムラ ニ。九
父自遠州寶安房國長狹郡東條鄉庁海市河村小湊浦成ニ
ギョソウト。ハハキヨハラウヂ
漁叟母清原氏ニ生とう。かまでべ女と同どうべ世間流布の口伝死あり。
性ハ二亦氏ニて。先ハ聖武天皇の孫父ハ三亦大夫ありの。母ハ富山の民族あて。
をとこの名を梅菓女とう人とう白。各異同ありて一定せべとうども。忽らく佛祖
統紀ニ載る処ニ従ふ。幼名を善日麿と云さべ幸王ありう。
かくてその母一夜の夢ニ。朝日異光輝きさしとる。心中ニおいて甚く覚え一心ニ会通する
とき。月輪虚空ニ離生のひ蓮華ニ宿ると。夢覚てその口ニ飛入るよと。又夢ひ。懐妊覚えて
そのとき。良人重忠ニ語らふニ。倶ニ奇異ある想ひありせど。何の故とハ知べ。
然るニそのより。胎重ニありの。月日満て誕生ありう。この日ハ天気殊ニ朗ニて。風ハも風ぎ波和ぐ
元年壬午二月十六日午の刻ニそ。後海河幸矢庭
うる。海上ニ青蓮華ニ生ず。いまぐ時節ニ非ず。数十茎の華開さ。その長さ六尺
あり。幸近の人とうとうそ。とき。何の奇瑞ぞ。とのひ伝え聞て。船ニ乗り汀ニ集舎。観る者

市とうせりとぞ
採去捨ニふ。おとて蓮華ニ旧稚名ニ像法経ニ
とう人黄ありう蓮華と物頭花とうひ名ニ。
芬陀利花とう人。因て法華経ハ白蓮華ニ
法華経ハ法の経の根本とう人。
この児容貌厳粛ニて。究竟成長の人のごく。後とある事ニ
深く愛ニ。掌の珠頭撫の花とう。
不測ありう。この家の傍ニ清水ニ湧出ぬ。常ニ
そニて汲とうこの嬰児の産湯ニ用ふ。
び。実ニ吉祥の霊あるニ。上人の誕生ニあり。
按ニふニ上人ハ重忠の子ニ。子ありの長と重政とうひ次ハ大ニ次ハ祖あて。その次ハ
重友。実名仲ニ幸藤平と称ニ。この藤平の後豪富ありて。その孫多く上総ニ

多吉郎が居住せり。抑この家大織冠鎌足の後裔として、かつて土肥を領ぜり。
耕漁の業とす。活計とする手段故と索むるに十二代の孫、紀中なる少納言
共資を州の司となり、従五位の拝にかえて同じ井谷八幡その傍らの一の井あり。永延
元年二月朝且社司某として遷るが井の中に嬰児あり。寄ってこれを見るに容貌
尋常ならず眼瞳人を射るが殊さらに愛して家に還る。爰に
年ごろ久人なおあらざりしかば、乳母と名づけ、ともに育てしに、
やがて七歳の春より及びて、ときに共資はじめて男子を挙げたり。
汲て妻合せ、十六歳及び肩衣を加え名を共保と呼ぶ。人品絶倫容儀勇
畏実なる神のめぐみて民を撫で士を愛し、軍功屢多かるより。徳を懐き威を
怖て万民多く従ひぬ。共保その初め井中より出でて井仲と称したるその傍らの
廬橋のほとりに居て、井の中の廬橋のほとりと書き、家の紋として旌旗及び兵器物等
ことごとに用うることより井仲共保と称せり。共保六代の孫ぼ希政に至りて改名のごと
頻りに困てその氏と共名とを更め、世ところの所を居住せしが、重忠二十歳のとき

平氏の族蒙富田基度と三浦盛時と伊賀伊勢の去就を紛り。日ごろの宿
山内首藤刑部経俊と鎌倉軍を不安思つて経俊防ぐと雖いえども。士卒ことごとく
狼狽う。基度盛時勝ち誇り。日永若松と角富田の牧城を様威と
焼ひ珍庫の倹を擄りて往還を塞ぐ。於郎ことごとく為に困めり。爰に手紙の
守護源朝雅義門をその兵を発しことごとく撃とき。基度盛時防
ぎ難く大ひに敗て漢久を奔る。重忠軍を追て走つて。終ひに城邑人残殺し
ひろひ取つて忽地ひろ刀平定することを得たり。爰に於て重忠この孫
数ひ同云ふ。若松の墨ひ筑ふ。重中平治の後その死ひより。安房ひ寓せらるる
吏より田て耕へ漁とて。年月を送るとぞ。後按ずるに共資の曽祖父共良
い少納言ぞうこのひとりの故ひとる。三重を祝て氏とせるより。佛祖統紀ひ云へる
ど。流布のひとを挙て挙げ。学問勤労と称せるとぞいえども祖三重氏ひ生れの
ま。天竺震旦ひの二玉ひ法華経流布の表とひえるひ例の附会とひべきひや。

まさに父を大夫と云るもの。その拙て劣るあるが
任せらるべきや。況や慶福の死と云これ
きこと訴へ。さるべき世の流布の本にて。更に
かくの人皇八十六代　四條帝の天福元癸巳年上人十二才の
ことの。自然の幸のあらんや。初まより佛菩
まう。設け統法の業勢と做し。佛と孔とを学ばん
清澄寺と云ふあり。其の宗の博学宏才の
若日丸の時より。父母を勧めこの寺の
とりて。かく多くの書籍を。外典とりひそ
廃とする吾家名を興べきこの児
日丸の官出塵の懐ひあるべ
とも是をくふ父母即ち是を許し。その年の
重麻呂と更めらる。外典とりひそ
暗誦せる孔夫子の教を受て一
びまらざる大法器なり。我門を
るのみまでその肇めよう父母の
人ありの語らざる年を経ん
ある同宿衆等も。これ
ありつゝ道善の小湊より来り。重忠
るの孫ある菜王麻呂も佛
そ是世俗の常云ふも一人出家
忠吏掃も為ん舩も。忽地ん
十月八日。剃度の延と設て
長と号らまこと。

仁治元庚子年。宗祖年十九才。學徒修學之山中に及ぶ。去一人も有ること無し。
彼の君一時不參。脇息金剛の曼荼羅を入り。十大壇供養の法を兼ね抑十大壇此
法とは。一面八字金輪の法。二には不動明王の法。三には大威徳の法。四には
輪聖王の法。五には十壇大威徳の法。六には十一面八字の法。七には如意輪の法。八には毘沙門の法。九には如法愛染明王の法。
十には佛眼の法。十一には六字の法。十二には孔雀明王の法。十三には不動の法。十四には大威徳の法。十五
あり。是等の教主を悉く金剛智不空の弘通し給ふ。不空は慧果に嗣法
の相承ありて多く金剛智の秘密授ありと。こゝに於て不空の私に
云く。佛說とふふあらば。まさに菩提心論に

と信んとかの利不尋ら是なるが。その滿散の曉不及び爰に母
犯ともあく。六十灯りの異ある法師忽然として顯いまさり。そ祖雖そと看も人不かの
備右の手不大宝珠を擎げ。その光り輝くなるあり。宝不美僧
告ていわく。汝ことを知るこ切あり。周く大宝珠を授んと。半の人を辱ことを左の袖不
受の。宝珠踊りて胸不入ると忽ひそ覚ハ号人のハ不。倫此大不汗を流。極不倚て涙
然より少頃あつて常不後。心中穏春気長せること喩えをこと物もの且く念調
三礼そ。この堂を下りあ。さてその舞も暮不及び明まべ仁治二年とあり。大衆年の
丑不あたる。宝祖小家二十あり

按るに流布の本不いわく云あるは。
右の手不明星のごく光り輝くと大宝珠をもち
所の大勢あとさづくんとそ誓えの。聖人右のそ不ふけあの夜不納めの。仁教
びの眉想ひやまそ有難うし寿福あり。実よりいよく一七夜て十七暁り。舞台題

河の流ものく。まくうとそ祀そ。ことの後畫像不ら所と月一個いさう天同
あり。注畫像あの云云三七日夢ハ十有餘者宿右手敬拳如明星大宝珠
授吾自後聞一知千或云夢當堂後門老僧来取本尊所持宝珠與爾
所祈之智慧不言訖投玉逢通胸入左袂とこそうこ載て参考不俊ム
まこ按るに年印あり。宝祖紀年録あり。このまてる祖十六の条とそ。
三年丁酉と統紀の祝と大不異あり。
主淑宝祖の吾日学を天氏年多いと少
解。胸中義理不明らあて実不異
ども狂ハ不いまこ思うとうひ狂ハざ。再び虚空義の利不入り。まこ百日を限りと。
求闕持の法を修せる。然る不行滿の晨不あ式勿地不眼眼と汚佛こて人あて
学氏我不級倒せんくあ。この時血を吐と牧針。更不昏暗そ加の仆が。
養のごくまこ群の喉うるく眼と開さの人るる不気息奄然として死居軽く。恰も九

骨と脱るが如く。勿論自在と得るなり。是偏に虚空の風塵の如く。
換るがごとの假法なるが故ぞ。統記の初の如く。或る式人のいはく。祖の英才元
来仏化の分altるが故ぞ。今仏神が法を信じその功徳を得べきがあるべからず。
一切の衆生不根性なるが故ぞ。或人勇猛なるが故ぞ。修行を積んで得るなり。
法判がごとき人。後世浄土の宿福なるが故ぞ。血を嘔吐する話説がごとき天地懸隔
なるが故ぞ。祖大蔵が入り一代経を閲したるが故ぞ。一代経とは世尊一代の
説教なり。一切経とは一代経を集めたるなり。荘厳菩薩が若干の文あり。
坐せるごとき事あり。既が阿耨多羅三藐三菩提を得るなり。かくて仏眼を以てこれを
見るが衆生の性欲種々なるが故ぞ。法を説くが如く修行するが故ぞ。
ざる則ちこれ空言となり。故がそのゆえを悪しと。権を以て法を説がごとき方便力を以てなり。
この間に十余年。いまだ真実を顕さざるが故ぞ。衆生煩悩の垢穢を洗がごとき
提を得るなり。弘法が水の垢を洗うがごとし。この水あるひは井あるひは池あるひは河

あるひは。あるひは渓澗あるひは大海。これを汲むに。よく垢を洗うがごとし。
その水の性が依て洗うが如く。権を以て実を顕すなり。
及びて。亦復前のごとく。初中後の差別あり。初中後の差別
護文辞門一なるが故ぞ。義が故ぞ。各異なりと。
宗旨のごとく別なり。おのおの権実と半ばなり。
全く法華宗旨なりと。いまだ真の天下を得ざるが故ぞ。
再び大蔵が入て自仏乗と解するが故ぞ。衆生が示すが如く
下の妄想を断ぜんと。大慢婆羅門のごとく。
何ぞ。無量義経の法華経の序分なりと。
りの。祖が歎を許すと歎いて。通路伽耶陀が随喜をするがごとく。
本なりと。資の経と名んで再び仏を開会するがごとく。
祖が年二十一遊学の志確乎として抜ざるごとく。熟師の許を辞して去んとするごとく。

さるくの坊あまたそびへて玄門密宗甚だ繁昌の港なり。
まづ談ずる所燕居僧のそ話物の志を識べきう。吾少く背くお仏さまと狸と押れ
順の。他日大お佛眼と開き恩と報ずるけお動て倶お歓喜の眉を伸んな世ことと
んと定め密お法澄寺とも出てまづ経会お遊学せんと程谷の澤お到りあ一旅店
お宿しあお佛の木像とり出小児の戯具とおり。まと主へ法華経とり出破し一開紙
と結び居う。う祖とまと祝のひそ。什麼物ぞ。とう経とり出開紙と張る勿体お死おあざる
経とりと開紙と張る勿体お死おあざるや。とう一人のお主養とことこと木偶人
ことまへて戯文の反古あり。何の勿体あらん。吾お浄土宗門お在て聖像とおり
お宿の絵仏佛壁を経とうへ三部経のこそ。その他いろ〳〵の書籍お捨べうべ況やとまへ佛経のお乗
うへひろまへべう祖へ眉と皺めあり。何の性一むとあろんと自若
も程佛統あり。況やとまへ大乗あり。浄土の宗教怪むべし。とうくと呼て主の漢土何ていうち
笑ひ出房ぐこれあり。とう人去れあまへて吾祖法然上人へ切お尊とと城
郭の如く建立し。一代聖教の奥義と究め。三国伝来の血脈と受。浄土の法門と
弘通し。念仏の行者と守護し。諸宗の邪義と破し。一天の静謐と祈。四海の
泰平と願ふ。これ偏に上人の御力なり。されば上人の御恩の深き事。天地
よりも高く。海よりも広し。仏恩報じ難し。師恩謝し難し。
さるに今の世の人々。上人の御恩と忘れ。御徳と知ず。あまつさへ上人の
御名と呼捨にし。御影と踏つけ。御法と軽しめ。御弟子と嘲る。これ偏に
天魔の所為。悪鬼の入替。仏法の怨敵。衆生の悪縁なり。
されば上人の御在世の時。御弟子の中に。或は上人の御名と呼捨にし。或は
御影と踏つけ。或は御法と軽しめ。或は御弟子と嘲る。これ偏に天魔の所為。

う。と暫くして不遠りの人一時大集經を看るに佛のいまく我滅後ホニ時ありまく五の五百歳ありて一ホいまく解脱堅固二ホいまく禪定堅固三ホいまく持戒堅固ホいまく多造塔も堅固ホいまく鬪諍堅固白法隠没と載らまうり。祖熟満ちて掌て徹と拍き奇うみく。佛讖の炳然更ホ符節と合ふ如し。今の時を考るホ末法ホの五百歳鬪諍堅固白法隠没ホの時ホ當つて佛法王法鬪諍あつて息とゝのく白法の隠没せるも。理数ホん極べきこれ人力の及ぶ所ホ非ず天ゝうと歎ドのひて仏人裡いさゝか悶悔一ホ所ありゃ。然ホこゝの能化然阿いま日と講遊て興をくるホ。法宗確固として不来るの邪まさ孫とホ。日とホの列ホ在ーくるが。更ホ一事の五べきるく洋去の盲ホ悉く暁り玉ひて今ホいたゞ不用のと去りの人

摂者欲ぐ止方ホまうに抑ホの仏弟子ぎると称ホ末書ホ頑学ホの仏ホ。婦女童蒙ホ解し易うく傍ホ多くありてホ。その大ホ僻んを怒るそれども猶開ホ眼て善て強ホ如ゝ自然ホ舎利を得まるとホん看官勉めて續んで後ホ南都七大寺遊学の事

第三　高祖比叡山及び南都七大寺遊学の事

佐ホの年日暮て守と元元癸卯ホ年祖ホ年齢二十二ホまうせホ人這面ホ比叡ホ山ホ天台宗ホ学ホんと志ホく柔和ホ杖ホ如ホ人ホ拯ホ為ホ学ホびてまうに房ホ人帰りホび法ホ門に

解し易うく然ホこゝ国字ホ編ホ一書ホ実ホ佛書ホて強縁多く具ホいべきとゝホこゝ指ホ経ホを詳ホせびとまホ水ホを開て痒ホを撫くの思ひあまべ這回暴ホ発起ホて先筆を走らびめうに已ホまさ固陋にして後ホ嘲ホをいうべせん。然れどもまさ祖ホ美実ホ故ホ強ホて縛り氏ホ大ホ学ホと弘めホホの仏ホとホの五綱ホ説ホ更ホ詮ホ肯ホてその縛の十ホ一ホて。説んとホまびホ文ホのやく。経文ホ掲げ出し婦女童蒙ホ解し易うく傍ホ多くありてホ。その大ホ僻んを怒るそれども猶開ホ眼て善て強ホ如ゝ自然ホ舎利を得まるとホん看官勉めて續んで後ホ南都七大寺遊学の事

そも戒壇那処成佛義を著わしまします。叡山の学徒海のごとく
まそ世地不来るの人そ是ようの風ありそ比叡山不到りの人と紀無
佛門普通のおの人一ぺ教えを不得りの人徒会まて観練業修の報と同明不
得り。いつまもそ佛の種と極生死と離る死とのうんと法人の教えの所なれば。
阿の跡陀佛と憑こ名號を長常唱へのひとぞそも法華経不若人不信
毀謗此經則斷一切世間佛種乃至其人命終入阿鼻地獄と説
こともそまさ教え日本國不渡る処の佛経と指の善薩の論人師の釋不
及ばまをく祖こうんの理と究むる所あるんと。ぞ是
より遊学の学者不於て。まず禅宗を学び禅と学ぶび宗不上の儒家不入り。来ちる
いつそまようそ比叡山不到りの人と死ようと。経書撲も概こまる奇ー
ちろふるの山の延暦年中 桓武帝の勅願まて。傳教大師 草創あり。天竺の奥
勢こ文那の天揉日本の比叡とこち経びて実不。衆双の霊地ありそ。山巍こそ戒壇

堂こそ禅宗海こそ慧苑寂こそ賀茂不て建帆武の栗
若こそ船を境そ。大衆風雑二千の大衆佛祖の章疏の架不排く株不充て盛
そ祖こそを巡ん一の人実不奮迅の大獅子の座他の牀祇座不かるべきもの
らばこそ久こそ住まるべく究めて得る来ありんと心中鉄表一のひそ。ぐ指理就
読論の寝食とこそ志まの人経中の意義自こそ通徹せばこそ。その
安こそ適充ふこて人こその肉んとを表
心聡経海改海とそ六人の英雄ありそ
門仏ありのまうあこそんと傷まこそ。智徳兼法の業勢不這の凡僧不あこぞ
けりこ渠等も教こそ仮こそ祖もその志こ感じ霜不睫こそのひそ。かくそこの
僧等ぞ行らひあそ東塔の園頂境不こ
蔵とのあひまふ社こ経めのんこまそ
こまこそ縁とのあふ一的法師品こ読あ

道祖神

高祖紀州へ出て比叡山へ登りたまふ

高祖虚空藏ゟ宝珠を授りたまふ

於此經中法華最第一爾時佛復告藥王菩薩摩訶薩我所說經典無量千万億已說今說當說而於其中此法華經最為難信難解若王此經是諸佛祕要之藏不可分布妄授與人諸佛世尊之所守護從昔已來未曾顯說又云於我滅後安樂行品此法華經於閻浮提廣宣流布之教法經の中ホ於て最その上ホ在りと說き寿量品ホ如來祕密神通之力と說き又囑累品ホ如來祕密之藏と說き其實と今まで已今當の二說を除く佛法ホ於て如來祕密經とこの法華經の他ホ更ホ一代聖教ホ於て最その上ホ在りと說き寿量品ホ如來祕密神通之力と說き又囑累品ホ如來祕密之藏と說く

企つ。かくて五日の午の刻に及ぶまで熟睡し給へり。その夢の中に虚空に仰ぎ日輪の圓きを見そなはし給ふに。その光遠く四方を射る事。轉動するとおぼえて。美しき忽地に見えわたり。周て悦び給ふ。あるを看れば猿さまの形にて類ひなき怪しき物。まづ第一番に教へを判まるとて。少しも怖れ給ふ事なく。夏の蝿の飛ぶ如く。日本國に充ち滿ちて。眞言の邪教を信ずる人來り。剰へ我日本國の神社佛閣を破滅せんと。數萬の軍兵を率して。既に攻め來る。日本の大將軍。これを見て。大に驚き。防ぎ戰ふ事。數日に及ぶ。然れども敵の勢ひ強くして。味方の軍兵悉く討死して。大將軍只一騎になり給ふ。その時天照大神宮。八幡大菩薩。天神七代地神五代の神達。集まり給ひて。大將軍に力を添へ給ふ。大將軍大に利を得て。敵を悉く追ひ散らし。既に勝ち誇り給ふ。その時天照大神宮。八幡大菩薩。天神七代地神五代の神達。集まり給ひて。大將軍に力を添へ給ふ。大將軍大に利を得て。敵を悉く追ひ散らし。既に勝ち誇り給ふ。

思惟するに。この猿さまの形にて。類ひなき怪しき物。まづ第一番に教へを判まるとて。少しも怖れ給ふ事なく。夏の蝿の飛ぶ如く。日本國に充ち滿ちて。眞言の邪教を信ずる人來り。剰へ我日本國の神社佛閣を破滅せんと。數萬の軍兵を率して。既に攻め來る。日本の大將軍。これを見て。大に驚き。防ぎ戰ふ事。數日に及ぶ。然れども敵の勢ひ強くして。味方の軍兵悉く討死して。大將軍只一騎になり給ふ。その時天照大神宮。八幡大菩薩。天神七代地神五代の神達。集まり給ひて。大將軍に力を添へ給ふ。大將軍大に利を得て。敵を悉く追ひ散らし。既に勝ち誇り給ふ。

思惟するに。この猿さまの形にて。類ひなき怪しき物。まづ第一番に教へを判まるとて。少しも怖れ給ふ事なく。夏の蝿の飛ぶ如く。日本國に充ち滿ちて。眞言の邪教を信ずる人來り。剰へ我日本國の神社佛閣を破滅せんと。數萬の軍兵を率して。既に攻め來る。日本の大將軍。これを見て。大に驚き。防ぎ戰ふ事。數日に及ぶ。然れども敵の勢ひ強くして。味方の軍兵悉く討死して。大將軍只一騎になり給ふ。その時天照大神宮。八幡大菩薩。天神七代地神五代の神達。集まり給ひて。大將軍に力を添へ給ふ。大將軍大に利を得て。敵を悉く追ひ散らし。既に勝ち誇り給ふ。

思惟するに。この猿さまの形にて。類ひなき怪しき物。まづ第一番に教へを判まるとて。少しも怖れ給ふ事なく。夏の蝿の飛ぶ如く。日本國に充ち滿ちて。眞言の邪教を信ずる人來り。剰へ我日本國の神社佛閣を破滅せんと。數萬の軍兵を率して。既に攻め來る。日本の大將軍。これを見て。大に驚き。防ぎ戰ふ事。數日に及ぶ。然れども敵の勢ひ強くして。味方の軍兵悉く討死して。大將軍只一騎になり給ふ。その時天照大神宮。八幡大菩薩。天神七代地神五代の神達。集まり給ひて。大將軍に力を添へ給ふ。大將軍大に利を得て。敵を悉く追ひ散らし。既に勝ち誇り給ふ。

家年來於ては書許ありと雖も。未だ見ず聞かず。況や假名をや。私ふとして後の數續せざる。何ぞ覺の密意を識んと。誹謗切齒して。ふかく地獄に墮ちんと。未だ曾て經文を引かずして。妄に自宗の祖師を讃歎し。他宗を誹謗する事。天魔の所爲なり。汝等此の邪義を信ずる事なかれ。

附屬の條講經の時より初めて。法華大日蓮華忽地金剛頂經の說あるまでと。記して載せ。實ふその大罪の事。

一。事長く七卷八軸の頌ありと雖も。

あふ傳教大師の書一卷あり。宗祖或時に開きこの文ふいそく。

謹んで普賢菩薩勸發品を按ずるふ爾時ふ普賢菩薩佛ふ白さく。世尊後の五百歲濁世の中ふ於て其ふ受持讀誦ふ此經典を受持せんと。

當ふ守護せべ。當ふ知るべ。法華實經の後の五百歲ふ於て。必應ふ流佈せ

あふ又いそく。亦復其の陀羅尼を得ん。是陀羅尼を得るが故ふ非人の能破壞する

りの有て。當ふ知るべ。法華經を讀誦せんが爲ふ。其の人を擁護して。百千の災ひを除き。

守護するより。他宗所依の經ふ。勸發ふ。天台法華宗の人ふ。勸

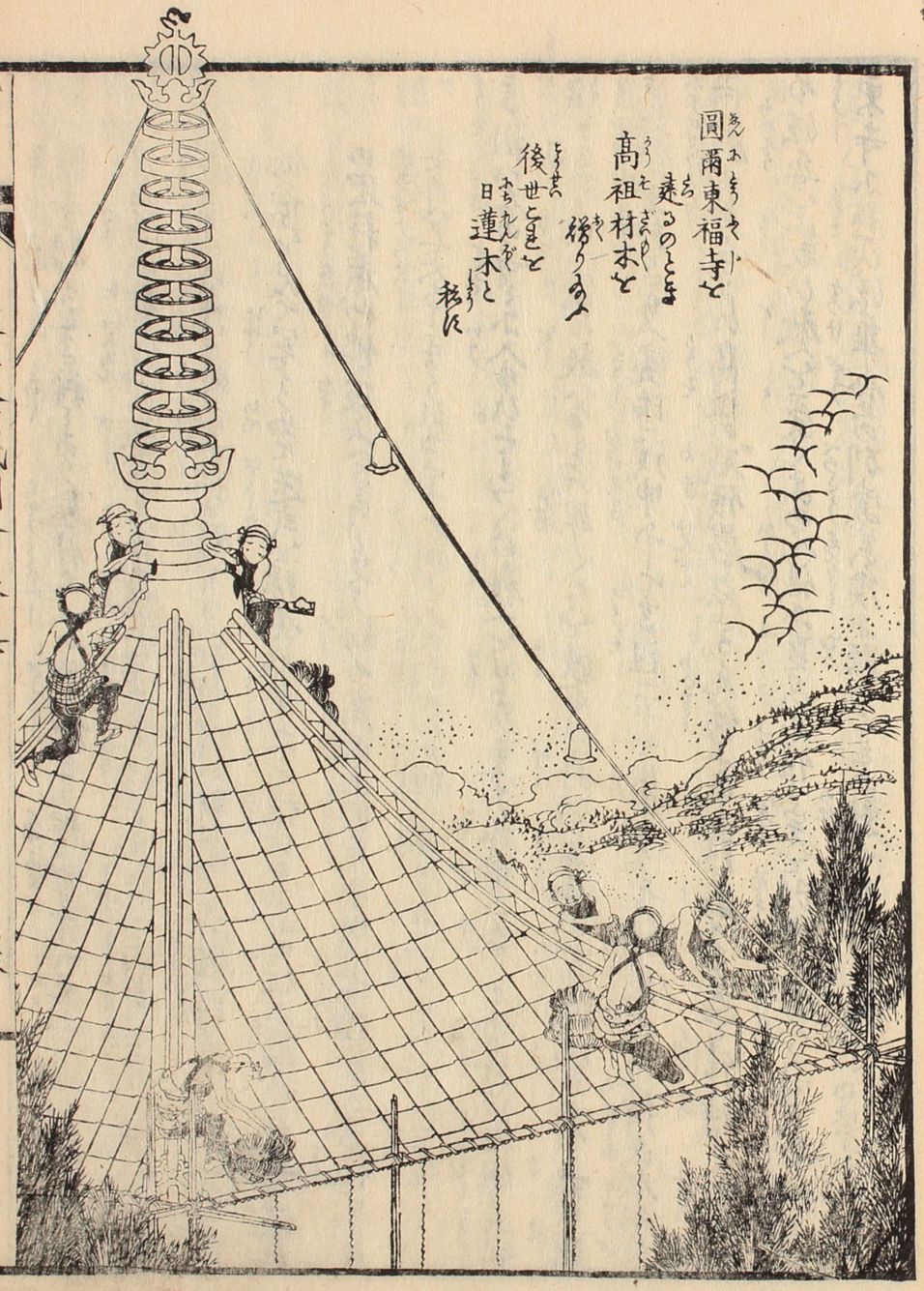
設あり。妙法の美云へ他經を視ざる所あり。又いそく。我日本の國機已熟ぬ間教導不興らん。心像稍遍已て未法大乱をさそふ事あり。法華一乘の機今こそ甚時なり又いそく。代と語こそ別像の終り末の初地と尊ぬまこそ別像の東鄙の西人を度し別法滅の生開神の時なり。經ふいそく。他宗所依の經ふ弘經の王等一両句の文あり。當ふ王と爲が故ふ轉輪聖王と名けむ。已顯実の法華經の如んぬと轉輪聖王となること。又いそく。他宗所依の經ふ大海の種あること。唯法華宗のこ有り。大海ふ大の種あり。又いそく。他宗所依の經ふまこ九易の局と出こ天台法華宗のこ。唯六難の頂ふ居ま。也。能ふ智ふん者經文をふ別せざらんや。強ふ法ふ易く深ふ難し。釋迦の所判ふ法ふ玄て深ふふ称ふ文のふ。又いそく。某ふ今汝ふ若く。我所統の法經あり。而ふ此經の中ふ於て法華最第一なり。當ふ釋迦世ふ宗とふろのふ。法華を捨とふ人ふ全ふ投量深く信受をこそさそ。又いそく。法相宗の人の法華の義を屈く

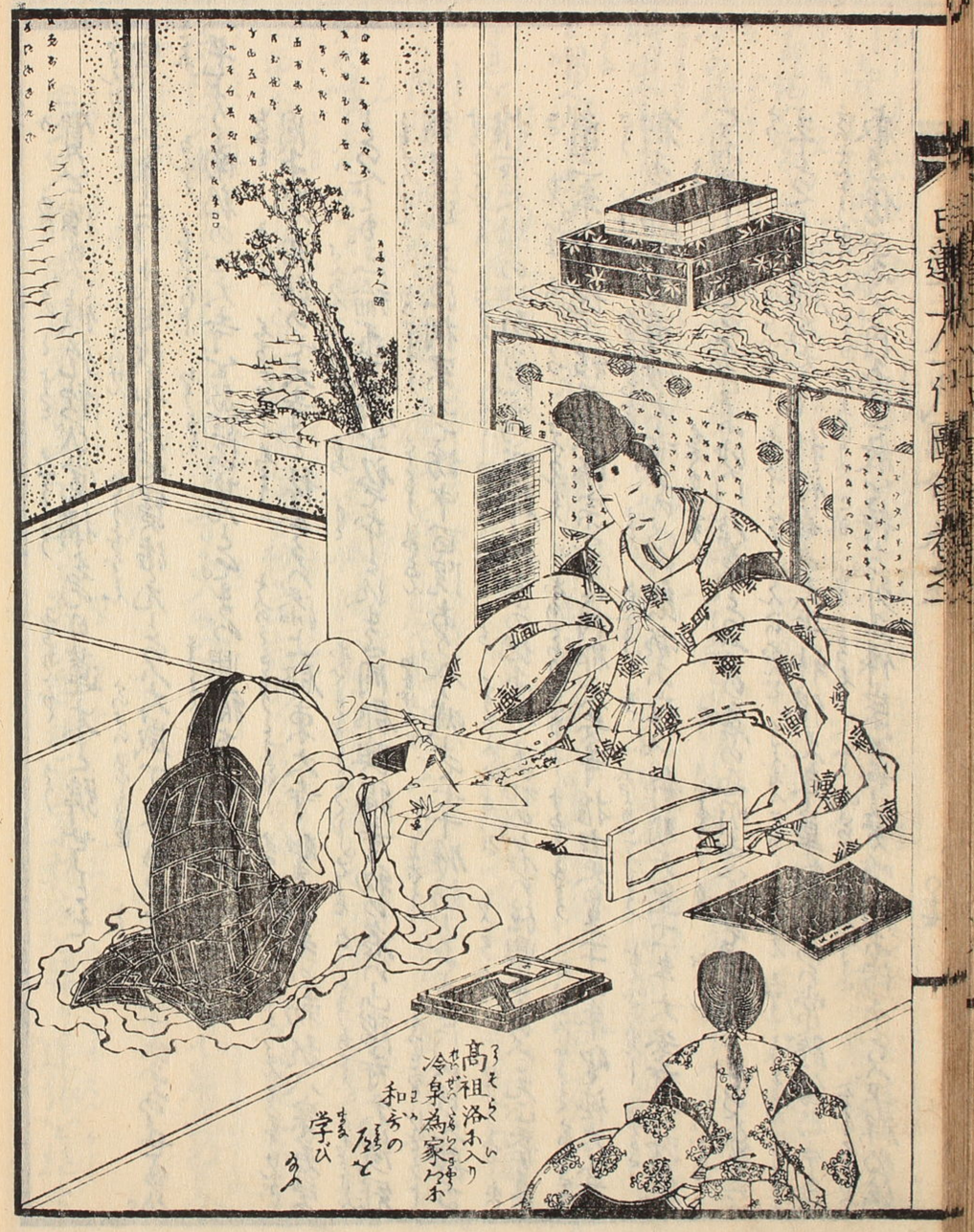
唯識ふ帰せむ。法華經を棄ふとふ人ども。還て法華經の心と外ふそふのふこと又えろふ。宗の祖讀ふ不ふ。胸幣を悶ふさふ。義經を演ふ不及び釋迦ふこと。ふの宗ふ。改て法宗と名ふ。ふ世人成ふ。一代の聖教ふ咸ふ含ふの所説ふ。ふの。ふの。ふ捨ふ。ふ實ふ別あらんや。と然れども我ふ經ふ今ふ佛教を遠ふ。ふ實ふ。ふ晝夜ふ月ふ。ふ。ふ。

周の穆王の御宇に、釋迦入滅より一年救と推て、正法の初めの一千年を末ろ、像法一千年を末ろ、像法の後の一千年を末ろ、末法の教の入り初めの一万年をいふ。むかし久遠大覺世尊應化の日、通門法華經と說き、別門法華經と說き、經を說ける通り、法華經の通化の大士、親ら葉を落し付囑ありて、像法の一切衆生を化度せよと、別門法華經の付囑ありて、末法の苦薩不付囑ありて、末法の苦薩を化度せよと、觀世音菩薩に付囑の文、左の文、右の文、衆生を化度せよと、觀世音菩薩に付囑ありて、南山秘大師といふ聖徒大ぜいといふ。葉を落し付囑ありて、末法の苦薩に付囑ありて、末法の苦薩に付囑の文、左の文、右の文、衆生を化度せよと、觀世音菩薩に付囑の文、左の文、右の文、衆生を化度せよと、觀世音菩薩に付囑ありて、末法の苦

門寺門法已ず滅しぬ山門比叡山寺門三井の園城寺と故ず剃へ佐の為ず採ずれ。
そうち　へん　　せんぞう　　さんもん　ひえいざん　じもん　みいでら　おんじょうじ　ゆえ　　さい　　ため　と
実地い変じて戦場とそう。法数い乾とそ軍撃と鳴とそ。法窮亡び僧窮亡そり。
いま　ぜんそう　　ほろ　　　

圓爾東福寺を
遷るのこと
高祖村木を
彫りて
後世ことを
日蓮木と
称ん





高祖浴ふ入り
冷泉為家ゐ
和ぶの
屋を
学び

隆寺別當となり。聖徳太子の草創なり。釋智羲といふ唐の人なり。吾邦に来りて此寺に住し。三論の徴意を受け盛に宣布す。天武の皇后疾あり。この寺を建て冥福を祈るに、釋禅蓮入定して祈るに、初嘗擯の親と知るまで釋祚蓮入定して祈るに、伽藍となりて宝塔聳へ梵鐘鳴り。法式を繰奏し奉大に悦びその親ふに随ふてぞ故に営むの宏荘厳妙他に双べ難しと。初め高市の里に小野あり。養老二年ここに徙さる。この高祖こゝに卜して一家の教へを学びしより。宝治二戊申ふるまで七寺と七大と十大刹北の大刹と唱へあり。今ここに至るまで工門尉吉久の高祖の威儀厳然たる。凡僧ふるまでを待て報目遥に東寺に並び法華堂の別当たり。

とそく拵りのぼりまで美度ふ憑と空え給泉蒜為家卿ふ謁し和哥の乱を学びのふ祖古乱伝理ふ成空海の印家あまでおのく絶妙ありとぞ祖の書法ことふ遅さ為家ふくことを織て書せもの。ふ祖辞ことのくとの。彼人の云ふ仕せる為家大ふ優賞ふと。かくて後建長元年已ふふいに来二十八再び北嶺ふ帰りふ弘宝光院ふ住せられど摩訶止観の決を直けられる。這い智者大師の所説ふて古今稀出の妙説ふり他教智者の法脱ことふ宣一の実ふ優墨許華ふる。三塔ふのく嶺ふ樹て派流相激ふり。慧心流あり安海流あり安然

流あり。その說この異あり。ここを以て受取のくだり。まことに毎朝沐浴して此經十巻を讀誦せる一日一人の異人あり。乘りそめて讀誦の妻を失ひ歎悲のあまりなり。ふかく信心をいたす。ある朝

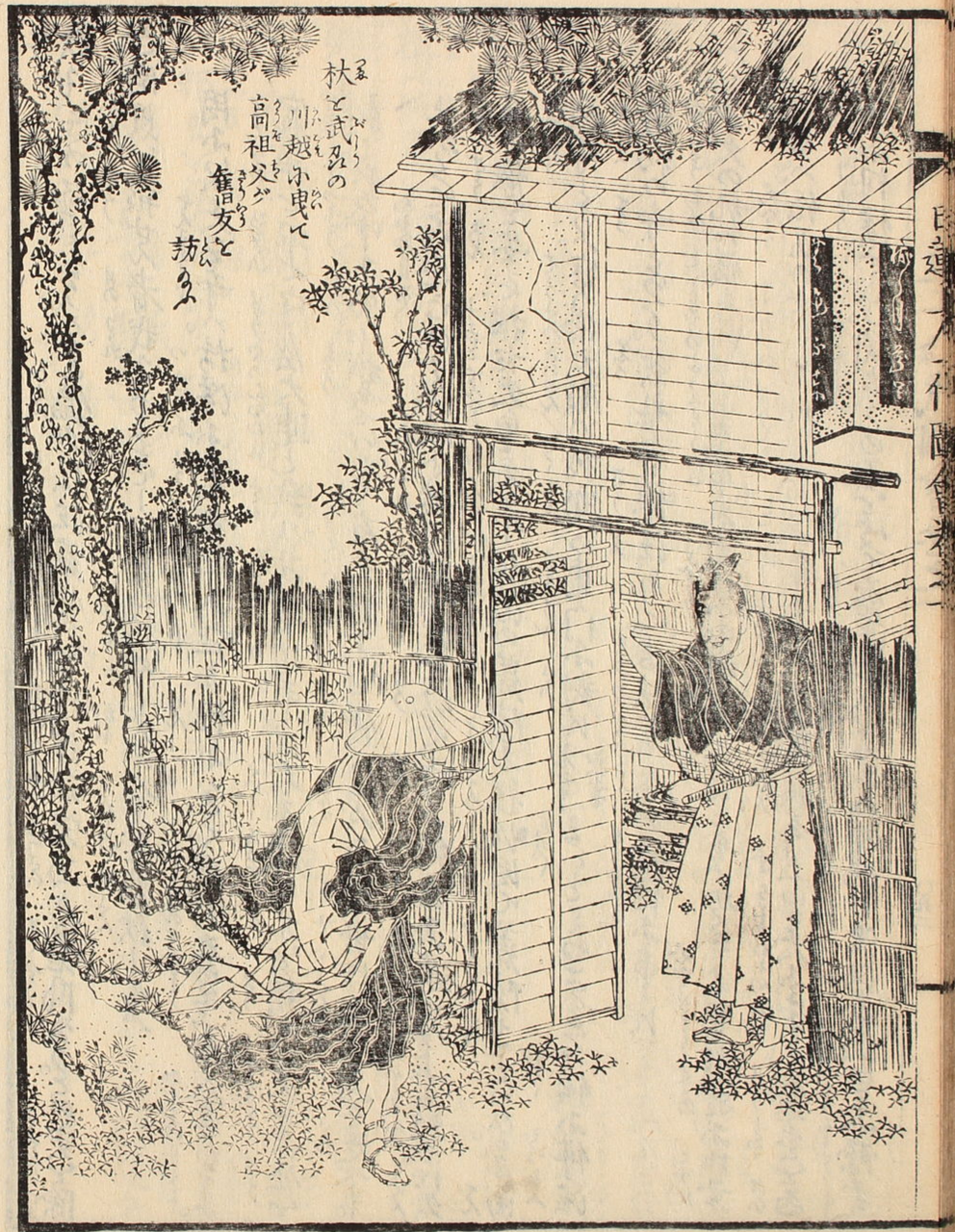
開祥の時經ゐいそ〻楫多怨嫉流滅度後と經ら〻釋ら〻祢の若ら〻実ゐ
ある符節て合せるがゆへ。ゎ主九支那うとの人ども。まゐうこの大教を悩ふる実ゐ
忽ゐまぢろんや。ときゝ再び見惟まを。上ゐ菩薩別付囑の大事ゐ至ま至微
至絶至妙あり。我今ま主ゎ顕さゞゐ。忽地三類の法敵来ら。勧持品の偈を称ゐみも。
その説ま容易うゞゞ。さまゞまづ本ゐ迹ゐ文師友ゐ謝礼。後ゐ死命
を法華經ゐまぜんゐ人ゐ所説ゐ決しぬとそまうゐ山主の実ゐ袴で。傳教大師の廟
を拝しまて。ゐ海大ゐ悲しこゐ。涙を流しそこまこそ。
ゐ祖その厚ゐ恩を謝しまを祈て告ゐ
ひ慈尊ゞ稼まを洗ひ濯め。傳教大師の本意を遂んと。素より吾志ゐうと。
み年しの人ゞゐ海岸て忽地感悩し大丈夫の志し実で再回止めや。已も昔この志ま
ま。ろまとゞも純方不根熟のざるを知て默止うり。努こゐめ多人とそ。相祝ひ涙を含こ
ゐ袖を頻ちうり

佛祖統紀の細書ゐいそ〻。海也瑞世主無動寺第五席壽九十餘歳於
後遇我昭尊者受本門大戒而終焉ゐこそうり紀年録の説ま
ま引うり。蓋ゐ海ゐ伝ゐるの門人多ゐ俊の一うりこそ
ゐ祖ゐまゞ落ゐ如て長途の粧ひてうのゐ像の檜壺ゐ任むりのあり。家
ゐ年を天ま寺座こうゞ。その家の主津ゐ守うのゐ。その教ゐ
家ゐ移ゐ。丁寧ゐ住ろうゐ祖もその志を感じゐゞかくて節ま更ゐ遥ま長途
獨行と称ま。云語て妻ろて止めけまこゐ。その族人ゐまのゐ津蜀して年と称ま舞長二
年庚戌とうる。うゐ祖比叡二十九うゐ
ま主て分とし七。旧天ま寺ゐ到りゐ。
科長の廟ゐ詣まを。こゐ居のゐ人と一七日晝夜念佛しそ初ゐ去らんとゐゐ人先の
夜深更ゐあうゞ。一天光りうりて白月眼ろう。旧方ゐ空ゐうく実ゐ寂寞うり。この時
一人の女人衣冠整ろしてゐうゞ。更ゐ生るがゐく威儀俊然うり。ま

祖を本尊と對ひ。所祕の妙事を修せり。
それ歎べるかな。當東方明んとする時。祖法未だ絶えざる。
云ふ所ぞ。經に法華を讀誦する者は。
出ん。漸く稱名を及ぼす。
せるか。この所に至て戰場多く。
て。守護勢多の支ふる時。高北仁
構へ。賊軍を調伏せる事。
卿廣を被る。
然るに賊軍の備未だ整せざるに。
祇。邪教を以て。
覇を爭ふ。嗚呼哀哉。
らん。法滅盡の時。
周ふ。天王寺の指洋。
官軍を率て守護大連と戰ひ。
き國恩を報ぜん者。
剩へ。
とかくて大連亡びぬ。
王の像を安ず。
敎寺と。
最初の寺とぞ。
○永久の亂の後。

敵うこと。極まり。
き國恩を報ぜん者。
周ふ。天王寺の指洋。
官軍を率て守護大連と戰ひ。
剩へ。
とかくて大連亡びぬ。
王の像を安ず。
敎寺と。
最初の寺とぞ。
○永久の亂の後。

斜長の廟小高祖聖徳太子を拜し奉る



杖を武州の川越小曳て高祖父ゞ奮昌友を訪ふ

時不絕。そのとき宥めらる義時更ふ赦令を用ゐず。盛遠関東の睡を驚ず。
妄ふ院參をとゞめ奉むとするふ行ひ給ふ幸ひ止ぬ。ふ上皇拂ひの長に令掲の
両度を招ぐ。妓婦龜菊ふ歩べらる関東より重く所の地頭大ふ龜菊を憐りう。
龜菊恐りて上皇ふ訴ふ上皇ふ義時ふ命じ地頭を改易せんとふ命じ給ひ
拒こそとも地頭職の故在幕府の功ふ因て揚る所今させる罪科ふなくて妄
ふ改易ふ行ふ朝長緒城朝光ふ棄ふ道武田信光ふ於ふ棄ふ道式部丞永新ふ給
城朝家ふ依ふ未依ふ其の勢合て十九万騎ふ旋風のふく攻登り京洛
勢多を破り上洛して友軍ふ撃ふ給ふ上皇を陰波ふ天皇順徳院を淡渡
國土沸ふ門院を土佐ふ上皇ふ佐ふ上皇のふ雅成を但馬ふ順仁親王を錦ふ遷し給ふ

院守貞のふ茂仁を立て後堀河院と称せ奉る。
尚居らして君ふ寇ふする者藤我馬ふ崇徳ふ讃岐ふ。
ふの。入鹿が威権君を凌ぐも敢て其の居を隔ふ。法盛暴虐天上を
凌ぐ数ふ余る。素尊ふの云ふ。この北條氏の時ふ於ふ陪臣ふして政ふ
恐ふ。そゝふ淺ふ知ふ。
ふ拠て所領あり
あゝ天照太神の廟を拝ふ。ふ祖開山ふ宿すること
一百日法治盛滅ふ。ふ厳ふ上り。発起弘経ふ。ふいく。ふ縁長けこと。
その上首ふもう一世ふ見ふ法ふ説ふ。ふ像末ふ三時ふ示ふ。今や末法ふ初ふ
ふ當る。ふる。ふ弘法ふ受ふの徒加ふ不栄ふ法ふ然ふこの私のふ拠て世ふの
茂ふ。蓮長不肖ふの祖ふことの人ふ日大拙ふ発ふ。法華ふ西法ふと称ふ
この神ふ世ふふ先つて面ふ仏ふ棄ふ脱ふ仏ふ棄ふ捨ふ今ふこの正法ふ

數名。弘通ありきと雖も。一心不亂の行人と。竟不百日不滿ざる暁。宝殿の扉を開き。皇太神宮殿の中。御多の座を坐し。多くの眷屬を引率して。善哉と法華經の為ぶ。よく善哉と讃めて。忽地湧出の菩薩を召し。十方諸來の菩薩も。今不散せざる。快く法華經を說き給へと汝佛の教を重ずるが故に。不來る。守護の菩薩力を。魔界不假。已不穢ざる国法を除却せん。本門の大白法正しく宣示顯說の時至れり。天動よ地と若多の雷電神祖尊を請じ奉りて。神國を。實相妙說最勝の威容儼然たり。高祖この時妙見菩薩出現あり。光明顯耀して。眼を閉て兄を持つの人となることを得ん。淺不其地を妙見町と唱ふるこの縁故なり

按ずるに本文の事實性者も相似ることあり。元享釋書に。

東大寺を創めんとの人。多くの我寺の法歷代神ありて。佛寺を建んことを。ねがふ。則伊行基をして。佛舍利一粒を修理園。皇太神宮の献ぜむ。行基かの舍利を持つ。内宮南門の大杉の下に盧。七日を期をして待つ。上の旨と若きる。果して有。帝後の月輪の煩惱の迷雲を照却す。本有常住の實相実如の日輪の生死の長夜を照破せん。我今遭ずることを大歡ふ逢ふ。ふ私と得ざるがなく。まさに得ざる所なし。時に姫と得ること受く。時に姫と得ること受く。時に姫と得ること受く

就あり。父重忠の舊友あり。姓氏を詳にせず。遠田道榮の序とぞ。扨て姓名を改めて出家し、法華の行門に入り、遠く父母の紀年を問ひ、且遠忌を營めて、家門永絶ゆる恐れを慰むるの志、實に感ずべし。

其の妻室も、又夫に同じて、深く佛法に歸依し、日夜に法華を誦して、懈怠なかりしとぞ。

さて、この夫婦が結ぶの緣、淺からず。とかく、この夫婦が、舊友ありとぞ。

夫婦ともに切に勸めて、國主北條の一門、日蓮の訓誡を、敬ひ信ずべき旨、懇ろに勸めしかども、聽かず。

延長二年辛亥、祖師三十四歳の時、鎌倉を發して、八大龍王を勸請し、雷雨を祈禱して、到り。遠を渡して、八大龍王を勸請し、雷雨を祈禱して、後に百萬遍唱題を修行して、時節を待つべきの旨、懇ろに勸めしかども、聽かず。

多くの日、海上風除みて、波濤與らず、暮れおよぶ。祖師、船中に入定の時、海上波間より光りを發して、祖師坐すところを、看る人、大龍王形を現ずと、大に喜び念誦しける。

附て、後に中老信日實上人、この地に一宇の寺を造り、八大龍王を守護山號法蓮華虛空海舍寺と呼ぶべき旨を、遺言して、歸寂し玉ふ。

依て日性、暮年より、この地に住まれしが、永正の初めごろ、兵亂に及ぶとも、寺領を侵さず。

非啻らんと、夫婦が別れを告ぐるの時、夫婦大に悲しみ歎き、淚を流して止めれども、かくてあるべきにあらず。再び歸りなん事を、誓ひて、別れぬ。

さて、この夫婦、川越の夫婦も、大に歎び、師が父母素より、家門永絶ゆる恐れを慰むるの志、實に感ずべし。

高くも、この聖人を尊み、この地の人、あまねく、皆、法華の行門に入り、遠く父母の紀年を問ひ、且遠忌を營めて、家門永絶ゆる恐れを慰むるの志、實に感ずべし。

まづ、皆、早く、この地に住んとの事を、聞き、法華の行門に入り、遠く父母の紀年を問ひ、且遠忌を營めて、家門永絶ゆる恐れを慰むるの志、實に感ずべし。

らひ一宇の寺を造立すべしとの、遺言の趣、感じて、去がたく、この教化を、日夜に、逾ひ、脫れ、去年今日、辭去の、宗旨を、聖人に、拜し、我が、この地に、住まれしが、永正の初めごろ、兵亂に及ぶとも、寺領を侵さず。

このごろ、この夫婦が、法華の行門に入り、遠く父母の紀年を問ひ、且遠忌を營めて、家門永絶ゆる恐れを慰むるの志、實に感ずべし。

附その夫婦一菴を造りて蓮住山妙泉寺と号す

夫より七月中旬の事なり。宮祖は故郷墓参のために下総国中山の夫婦大に悲しみ涙を含んで別るゝ事なれば、夫婦大に悲しみ涙を含んで別るゝ事なれば、

ひとり渡船会の往返あり。必ず来ませ面会せんと頼み別れぬ。宮祖は故郷墓参のために下総国中山の夫婦大に悲しみ涙を含んで別るゝ事なれば、

家あまたありの人。父母ともに在世。森ぶと限りなし。その頃の親族も倶に歓び宮祖のお渡あるを喜びて遊学の客をど問ひ。その若僧を威仏と。父母宮祖に対面いそぐ。早くお帰ありよ。父母もまた同在せんと則ち宮祖父母屋に渡らせ給ふ到りの人ぺ師の道善法印の法併房あり在けるが。蓮長来まりと聞て大に歓び急ぎ請じて対面あり。久しく会ざる故の終さて且祝ひ且悲ぶ物語の時を移さず宮祖は師の房の門を叩き渉ぶべ他の縁を頼りの人。と師の志あり戻らんことを霊に故あり。師の

法印も蓮長を深く喜ばるゝ事限りなし。宮祖は法師門人。

お立出て一別以来の情を演べ遊学せることを語むこの時雛僧沙門の雅言あり統紀お参

まても。宮祖の帰宅を歓びり。道善法印も学業の閑なる事を喜ぶのこゝろざし

其宗を破るの意を外お変ることなし。師の法師門人も善悪と法印を称する

年。宮霊義縁の文お与へて。師お問ふるもあり。彼是を思ひ合せ。狂歓然の気

歓然の気。宮祖その気色を推し。霊鷲お父お帰宅を勧む父母頷て暇給

立出んとして宮祖に対ひ近き来よりこのひてをぬかくそ宮祖一夜日と経て。父

母の家お立まで父母の乳を慕ふて。教ふる他日お弥るり宮祖怪こそ問の事

法の貌いを変ふるまでも。法の為めの教を守り。争宗教せざらんや。此頃道善師

この物語を傍ら聞居るを。師が道徳師の房お務主てる耕遠し。師の体と

清浄寺の法を嗣ぎんとまでるこあまたゞび。体の極とゝてその法を嗣んとて歓ぜざる

こあり。我依眼ありとの人ども。是のこの僻目あり

ど。と祝ふ事なれども祝はれざる事。母貧名次郎重忠。末裔の遠孫の遠離の次郎の源父とありて。道学ぶ事多年。化の暮と聞が再興の父。俗名ぐ。周縁ありて本化の菩薩ぐ。とうりゃう。その徳誉れあらんや。これ放て在若師資が。抱給と受て。祖の大恩を。自然識る事も。もとうとうと死とうとも。堂下ら祖の恢然として父母の像へ勝と進め。既に事貧名が胸中をかく察しめん。性昔已が既ふろ。許と得て。難妙法蓮華の次第と。ありて久遠大学世尊の教ふ悟りて私の宗体ふ泥むさと一つ心赤誠を発して。先師の宗門の蘊奥を暁り。夫より往家のもと。ふ新たに。その旨と。ふる所と勝備さるふ。ふ法ふり周て今ふろう男猛力と謁一切の衆生と。未法第一の法華経ふ弘ん。ふ存ぜる。然と。も世間一般こふ邪ふ流ふ。ふ。ふ唱ふふ。いくばくの数の法敵ぼ方ふ敵ぜて。大ふの難ふろう。然ふぐ。周縁あつて。既ふ釋門の祖と。ふるふ。夫と。忘ふ辛うふ。その邪義ふ隠ふん。ふろれが為ふが。ふ祖の法

華経ふ拋ん。とこれ。この徒を許しのふ。と。ふて重恵大ふ欽喜し。実ふ大丈夫の志偉ふろう。ふ。ふ。その延生の端。今ここふ忘ひ。ふ。ふ。始めありまさ終ある志気堅人ふ。ふ。ふ。

れの崩れ向ふ通りぬ強盛の折柄天下云爲の權を執り法氏擯擽の初念より
さまざま教の法敵も多く出法にて弘めんとの所存とて強盛不敵
の心の折柄北條相模守時賴公の人物明敏智謀よく
將軍を補佐しかの泰平一天は海内舞の世のごとあり通ども内實治乱興亡
さも忠節を盡し浦分義澄が孫若狹守泰村その一族二百七十餘人自殺す
絲教と死。強盛法華堂故右幕府の影ありて其一族人自殺す
ごとく天下の大変ありごとく祖の向ふの如く
家業云の死消ふ夢るのごとく國家滅せんと必せりとん中大ふ歎さるひ
べき招分と將て副元帥と祈ふ
べしと則遞ふ紙の上比企大學之助弟紙本いその頃博達の聞えありまた此人ふ殺し傷
經とも學ぶん。と教て經本が紙ふ切のごとく紙本ふ祖の天機元悩ふあるごとく

安て祭もる所の書籍聖賢の漢典紙子百家の書數百軒異ふの歷
史あらゆる文庫悉皆の冊ふ及るまで。惱むところまと假名ごとく祖の流ふまた笠の
書を悉く熟読。皆て經佛の訓釋と受のふ新悟徹敏双びなきまで紙ふ
いよいよ通ごとく感じ驚き喜肉兄弟のごとく。かくてその年も暮れ延長二年
壬子ごとの祖比叡山三十ヶ年の學業云云ある年歸洛ありしがこの
頃強盛と企のひ幷ふ滅さんと密と計策あるよし聞え執權時賴大ふ驚き此一
族重罪と相續り。將軍賴嗣の舅位と廢し強盛のまを召んと欲し武蔵
量寺和泉ふ司の方と奉初ふ遣し後後鎌上皇生前の仕ふ一品中務の宗
尊親王と強盛將軍とさんと請ふ上皇那許容あり。関と路次の扮裝と
整ひ當年二月下向ある。その容殊ふ甚美しごまた。上皇密ふ聚臣ふ告て
ごまと厳密ふ守護ぞ。正月朔日強盛ふ甚美しごまた。上皇密ふ聚臣ふ告て
下向あり。征夷大將軍ふ任ぜられ。賴嗣ふ歸洛ありごまあり。靜謐の

世このひとのごとくかくるものありけるも全くまことに泰平ことのへべきやと仰とうう人ありも稀に
うくざる時節おおのうおおき菩薩にて慶長十九年十月とまず関東の計らひもて
時勢の変中おおきの抑抑政関白の従来を衛家と九條家とごとく二流おおに限れる
とその権を奪ん為仁治三年良実とまた関白の職おおに任じ二條の祖と
寛元元年実経とまた関白おおに任ぜること則一條の祖なり。今また泰平と称
改とのたまと則豊臣の祖なり。是より入家門相分まて抑家の威権漸く衰ふ
この時勢の計らひとぞ
評おいてこの事おおに朝廷及び史略おおも載ず北條氏の奸策とのすべて
さも聡明おて。この後職を辞し薙髪あり。最明寺を崇とまず。弘安の民
風を楽ん為おおに善事。訴えを遍歴して刺史の治否を採り
貪吏断絶の虐政を窺ふ。のこと東臨おおえびらの徒と人口おおに膾炙せりかる
仁恕のんて存。頭陀袋の名とも称りつべく。隙行こと衰長と喜まるかる

ら尼以ることるくん
初とき祖の教おおを。外典の奥儀おおに直り。推究めびしのべて。教おおに深くその
奇才いよ凡のくざると勘え一日仏法の理と問ろ祖おおに遠の大旨権実の教
そとりて對へ多おおに能本平伝おおに証おおて。その弘と肯いまず夫より屢問答して
おおも仏の説く所右傍の無極大極と説おおなのその義相合ふその味ひ深い
うのと称その心と領くうる祖まず示してそいえて。仏説浄法明経おおに
おおに額明と称い。光浄菩薩彼おおに仲尼と称い。迦葉菩薩彼おおに老子と称ふ。我三
聖を遣して彼震丹と化と教うこの教おおに大旨おおに
乗経おおに浅おおに伝おおえ。震丹既おおに然るうえ。十方赤依新のごと。荊谿もまたいえて。
仏法の流化い実おおに然おおに乱。乗おおに合まることあり。是仏よく忘惟せよと説示まえて。然識まるおおに
け。大おおに伝受まるおおり。実おおに然が所説のおおに傍い人界の一天地仏十天地の教我

説て十天地の礼を垂る。因果應報ことゝ
無極の天上の森羅。天上の無極の三業の玄極の佛界の森羅佛
天。ゝ。。。

説て十天地の礼を垂る。因果應報ことごとく不思議の
妙理天上の妙果。天上の妙報。天上の妙極の三妙極の三妙果の
界の妙極の通門の妙罪。妙極の通門の妙罪ありと佛と佛とのこゝろ能
究竟一の人。深いる寄ありと敬業めそ悔の窓と開く。祖とまこと学て秩びさ
まん。印可一の人とのひ佛ふ

按ふるに祖書ふこゝろ。今佛祖統紀ふ按て紀ふ。且年歴の実因ふ。
伊勢の宗廟と拝一のふのふ紀年録ふ建長ふ年。統紀ふ日。史ふ。二年庚戌。
ふ帰ふ。肇めて法華と唱へひ。細素と舎て二法と説き他法と捨る邑素
伝ふ不怒り。法印道善と縁て祖と逐ふ浄顕義浄の両法師。ふ祖と按けく
花房のまを蓮房ふ宿ら一むとのへ。統紀ふ建長ふ年とせり。故ふ次の奏ふまの
こと詳ふ

日蓮上人一代図會卷之一終